

## 2 詳細分布調査

調査は1991年10月11日から同17日までで、遺物を全て表面採集する形で実施した。十三湊遺跡の分布調査に関するデータについては、前回の報告〔千田・小島・宇野・前川 1993〕で詳細に述べており、詳しくはそちらを参照して頂きたい。今回は十三湊遺跡の分布調査の成果については要約するにとどめ、前回報告が不十分であった福島城の分布調査の成果について補足する。なお、十三湊遺跡の採集遺物分布図については今回若干の修正を行っている。

### (1) 十三湊遺跡の分布調査

調査をするに際しては、都市遺跡「十三湊」として遺跡全体を包括すべきであるという認識に立って、国家座標軸  $X = 110.5$ ,  $Y = -43.0$  を原点にし、遺跡全体を網羅する形で50m方眼を設定した。そして、北東コーナーの座標が地区名となるようにして、地区毎に遺物を取り上げることにした。

採集遺物は量的に多く、中世遺物と近世遺物に大別される。中世遺物はさらに土師器・瓦器・国産陶器・輸入陶磁器に分類される。これらの組成比は第2・3表に示すとおりである。

次に、時期が判明するものの遺物の散布状態を破片数で見たい。

第2表 十三湊の種類・器種別食器組成  
(1991年度分布調査分, 14~15世紀主体)

種類	器種	破片数	口縁個体数
土師器	皿	7	0.1 (100%)
	計	7	0.1 (1.6%)
瓦器	(香炉)	2	0.2 (100%)
	(火舎)	2	*
	計	4	0.2 (3.2%)
国産陶器			
珠洲	壺	49	0.1 (7.1%)
	甕	69	0.2 (14.3%)
	すり鉢	108	1.0 (71.4%)
	碗	1	0.1 (7.1%)
	小計	227	1.4 (93.3%)
越前	壺	6	*
	甕	27	0.1 (100%)
	すり鉢	3	*
	小計	36	0.1 (6.7%)
常滑	壺	2	*
	甕	10	*
	小計	12	*
備前	壺	2	*
	小計	2	*
国産陶器	計	277	1.5 (24.2%)
国産施釉陶器			
	碗	73	1.0 (62.5%)
	天目碗	8	0.1 (6.3%)
	皿	11	0.3 (18.8%)
	おろし皿	3	*
	盤	7	0.1 (6.3%)
	壺	9	*
	(香炉)	3	0.1 (6.3%)
	計	114	1.6 (25.8%)
高麗青磁	碗か壺	1	*
	計	1	*
中国製青磁			
	碗	117	1.8 (94.7%)
	皿	1	*
	盤	3	0.1 (5.3%)
	壺	1	*
	小計	122	1.9 (67.9%)
中国製白磁	碗	38	0.9 (100%)
	皿	1	*
	小計	39	0.9 (32.1%)
中国製陶器			
	天目碗	1	*
	褐釉壺	2	*
	小計	3	*
中国製陶磁器	計	164	2.8 (45.2%)
総計		567破片	6.2個体分

第3表 十三湊の用途別食器組成  
(1991年度分布調査分, 14~15世紀主体)

用途		破片数	口縁個体数
食膳具	土師器	7	0.1 (2.2%)
	国産陶器	1	0.1 (2.2%)
	国産施釉陶器	99	1.5 (33.3%)
	中国製陶磁器	161	2.8 (62.2%)
	小計	268	4.5 (76.3%)
貯蔵具	国産陶器	165	0.4 (100%)
	国産施釉陶器	9	*
	中国製陶磁器	3	*
	小計	177	0.4 (6.8%)
調理具	国産陶器	111	1.0 (100%)
	国産施釉陶器	3	
	小計	114	1.0 (16.9%)
総計		559破片	5.9個体分

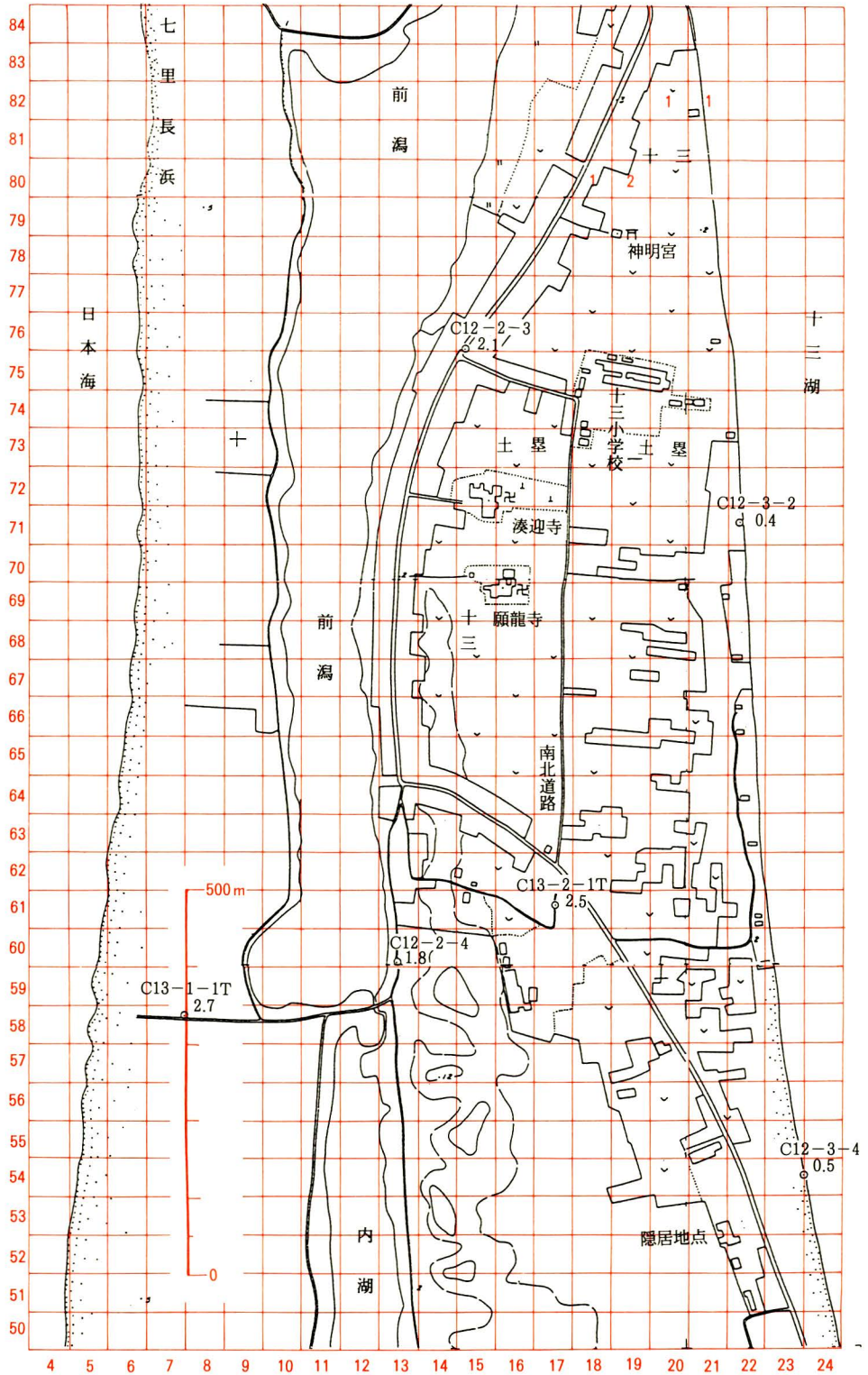
12・13世紀(第15図) : 神明宮北側の地点で3点, 湖岸沿いで2点ある。そのうち, 中国製陶磁器白磁碗の底部, 珠洲甕の口縁が重要である。

14世紀(第16図) : 12・13世紀を比較すると, 神明宮東側を中心にさらに広がり, 土壘北側までに及んでいる。南は, 南北道路沿いの湊迎寺付近でも4点ある。

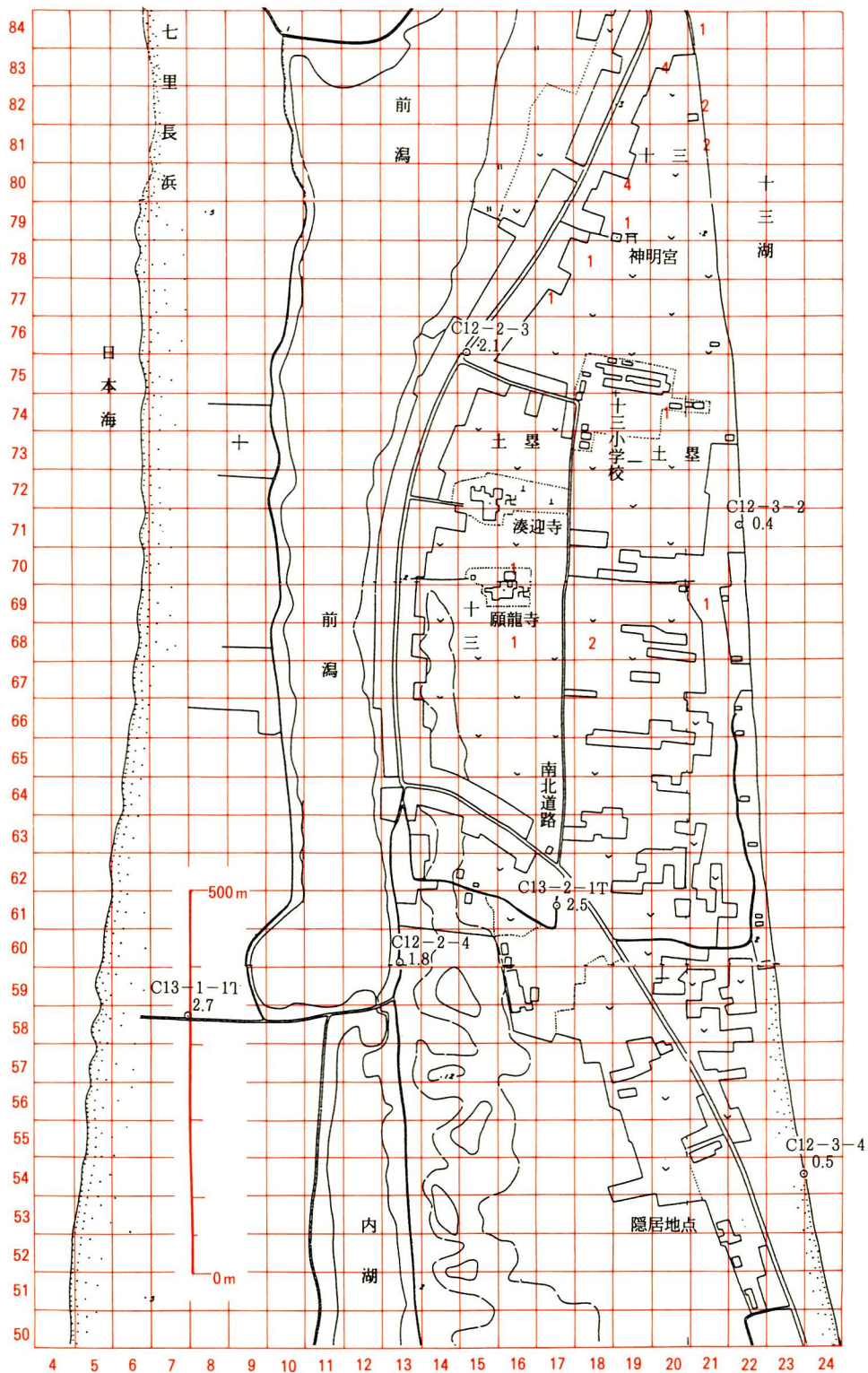
15世紀(第17図) : 14世紀と比較すると, 土壘の南北で明確に分布の集中地点が分離して, 南北道路沿い東西に広がり, さらに湖岸沿いも濃密になることが挙げられる。

中世全体(第18図) : 大半の遺物は, 詳細に時期が判明していないものであり, それら全体を見ると, 分布は神明宮の北約500mの湖岸に始まり, 南は隠居地点の南約400mの地点にまで伸びる。分布の中心は大きく3つあり, 神明宮周辺, 湖岸沿い, 南北道路沿いである。

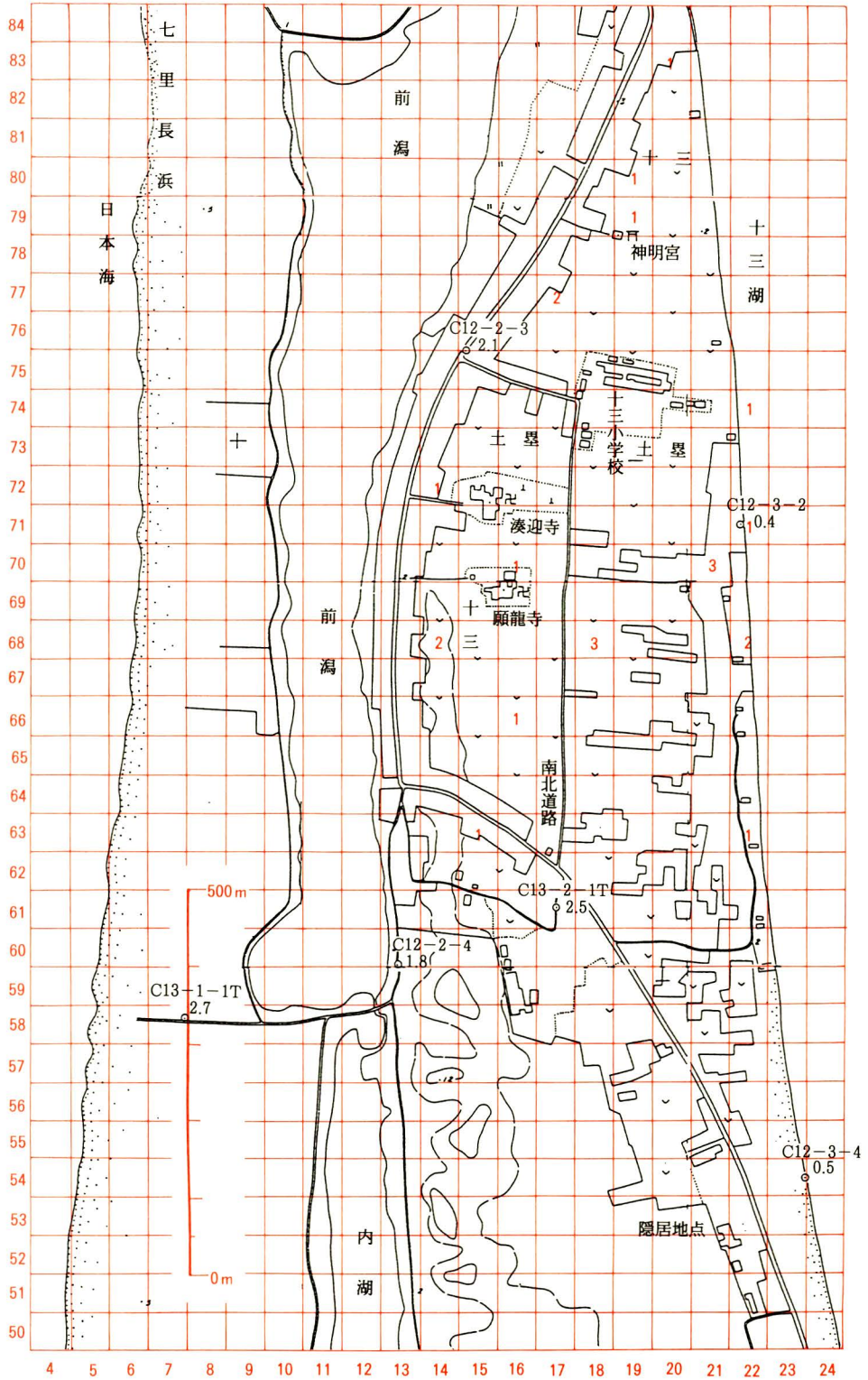
近世(第19図) : 近世の遺物分布は, 面的な広がりとしては, ほぼ中世と重なるが, 量的には, 東側海岸沿いよりもむしろ南北道路より西側に分布の中心が移る。



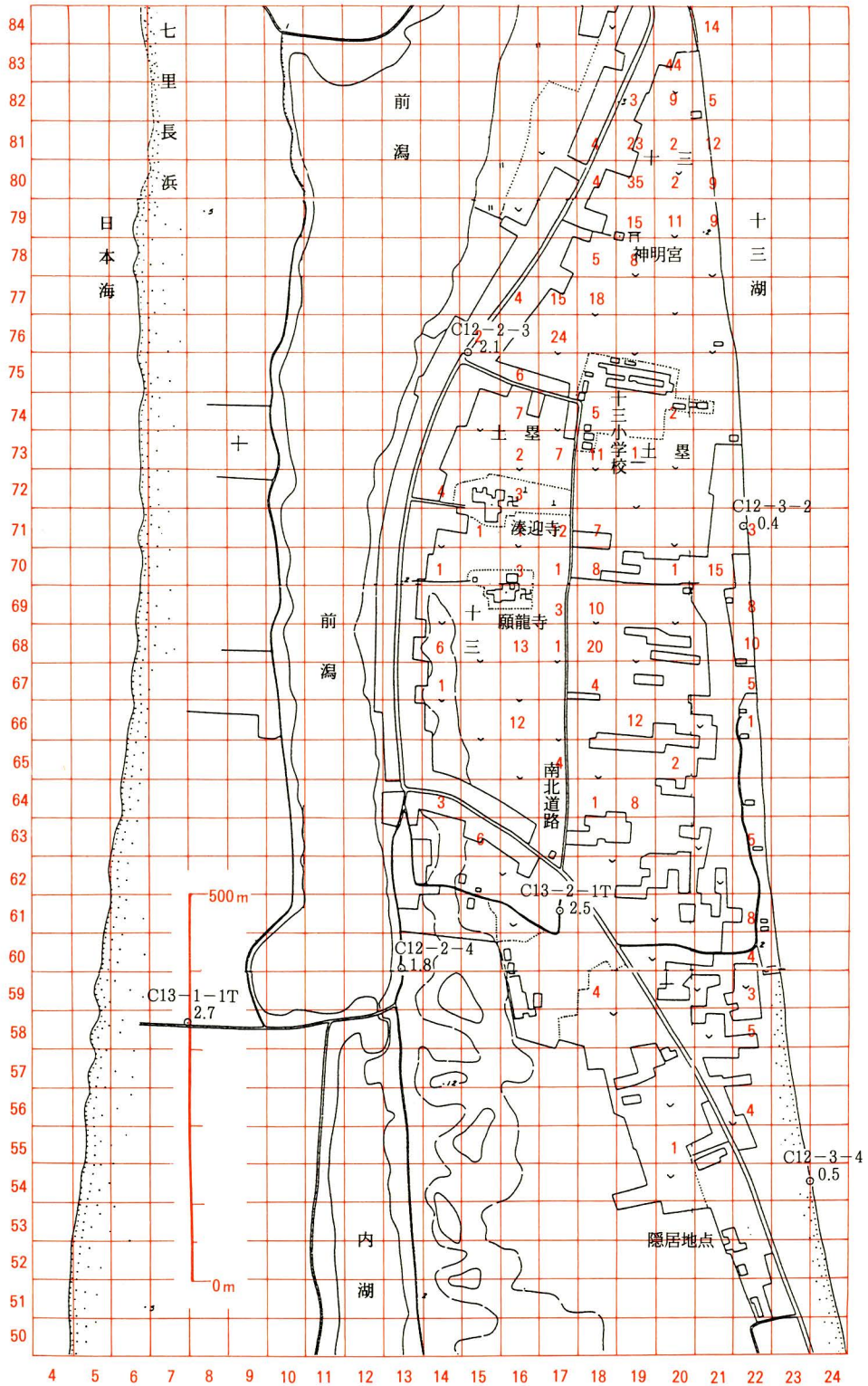
第15図 十三湊跡跡時期別採集遺物分布図(1) 12・13世紀 (数字は破片数) (市浦村森林基本図を改変)



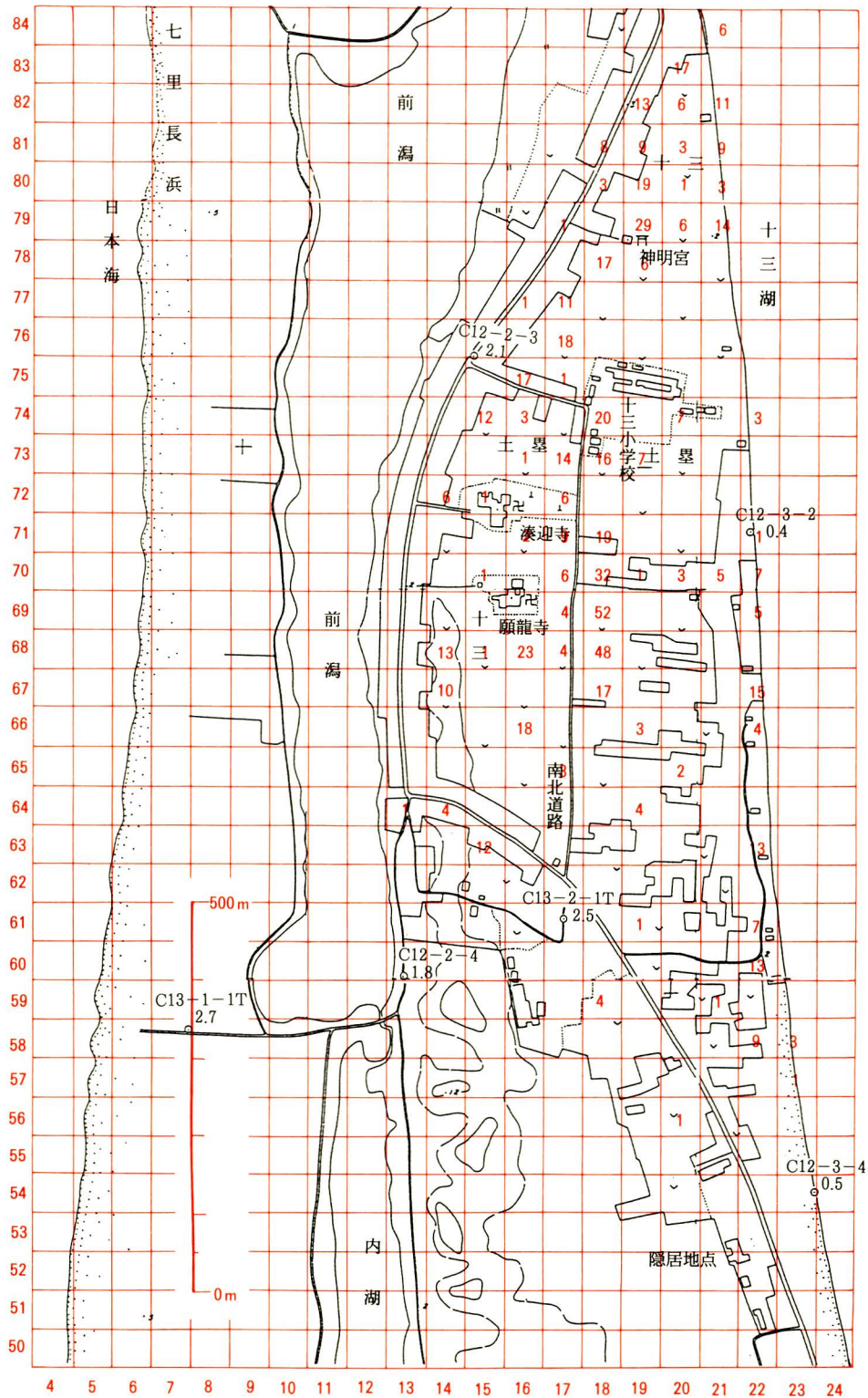
第16図 十三湊遺跡時期別採集遺物分布図(2) 14世紀



第17図 十三湊遺跡時期別採集遺物分布図(3) 15世紀



第18図 十三遺跡時期別採集遺物分布図(4) 中世全体



第19図 十三湊遺跡時期別採集遺物分布図(5) 近世全体

## (2) 福島城の分布調査

福島城においては、古代・中世・近世以降の各種の遺物を採集している。遺物の散布状況ならびに採集内容は以下に示す通りである。なお、珠洲については吉岡編年〔吉岡 1994〕に従っている。

### 古 代 (第20図)

古代の遺物は「内郭」部分で須恵器1片が採集されている。また、「外郭」部分では「内郭」から南方向に伸びる丘陵先端部において土師器甕5片、不明品1片が採集されている。また、「内郭」外、東側の畑地においても土師器3片が採集されている。これらの古代遺物は細片が多く、図示できなかった。今回は古代より遡る遺物は採集されていない。

### 中 世 (第21～23図)

中世遺物の散布状況は第21図に示した状況である。「内郭」部分では中世遺物が全く採取されていない。しかし、「内郭」外、東側の畑地においてまとまった遺物の散布状況が見られ、中世遺構の存在する可能性が高いと言える。

遺物は第22・23図で示しており、以下、その概要を述べる。なお、遺物番号は第21図の採集地点番号と対応している。

1は白磁小碗の体部破片である。釉には貫入がみられ、外面体部下方は露胎である。15世紀前半代である。

2は白磁碗である。口縁部は外反しており、釉調は灰白色を呈している。14世紀後半代である。

3, 5-1は青磁碗である。特に3は器壁が薄く、シャープな作りで灰色を帯びた透明感の強い釉が薄くかかる。体部には回転ヘラ削り痕が見える。14世紀後半代である。

4は青磁香炉の底部破片である。獣脚部分が欠損している痕跡がある。

5-2, 5-3, 5-4は珠洲壺の体部破片である。叩き目は3cm幅で約8条と粗く、叩きの打ち込みも浅い。珠洲V期(15世紀前半代)である。

6は珠洲すり鉢の底部破片である。内底見込み部は使用されていて摩滅している。卸し目はやや粗い原体で全面に施されている。底部静止糸切り痕が見られる。珠洲V期(15世紀前半代)に相当する。

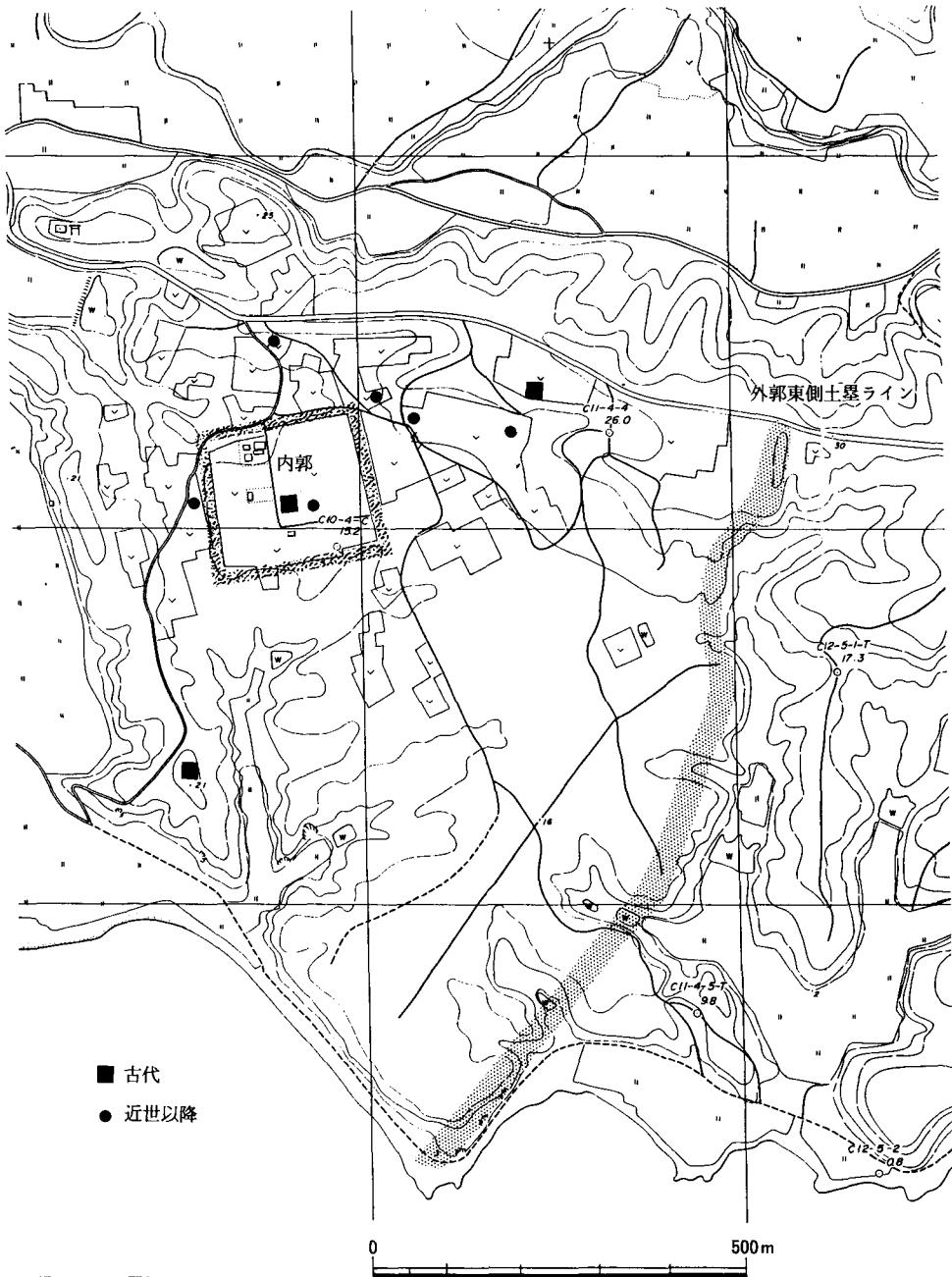
7-1は珠洲すり鉢の体部破片である。卸し目は中太の原体で全面に施されている。外面はロクロ痕が明瞭で凹凸が激しい。珠洲V期(15世紀前半代)である。

7-2は珠洲すり鉢の口縁部破片である。やや内傾して面取り調整を行っている。端面には櫛目波状文帯はない。珠洲IV期～V期に比定される。

### 近世以降 (第20図)

内郭では伊万里を中心に、近現代の遺物も含めて計7片が採集されている。また、「内郭」外では北・東側の畑地を中心にして遺物が散見される程度で、計5片が採集された。遺物のまとまりは見られない。

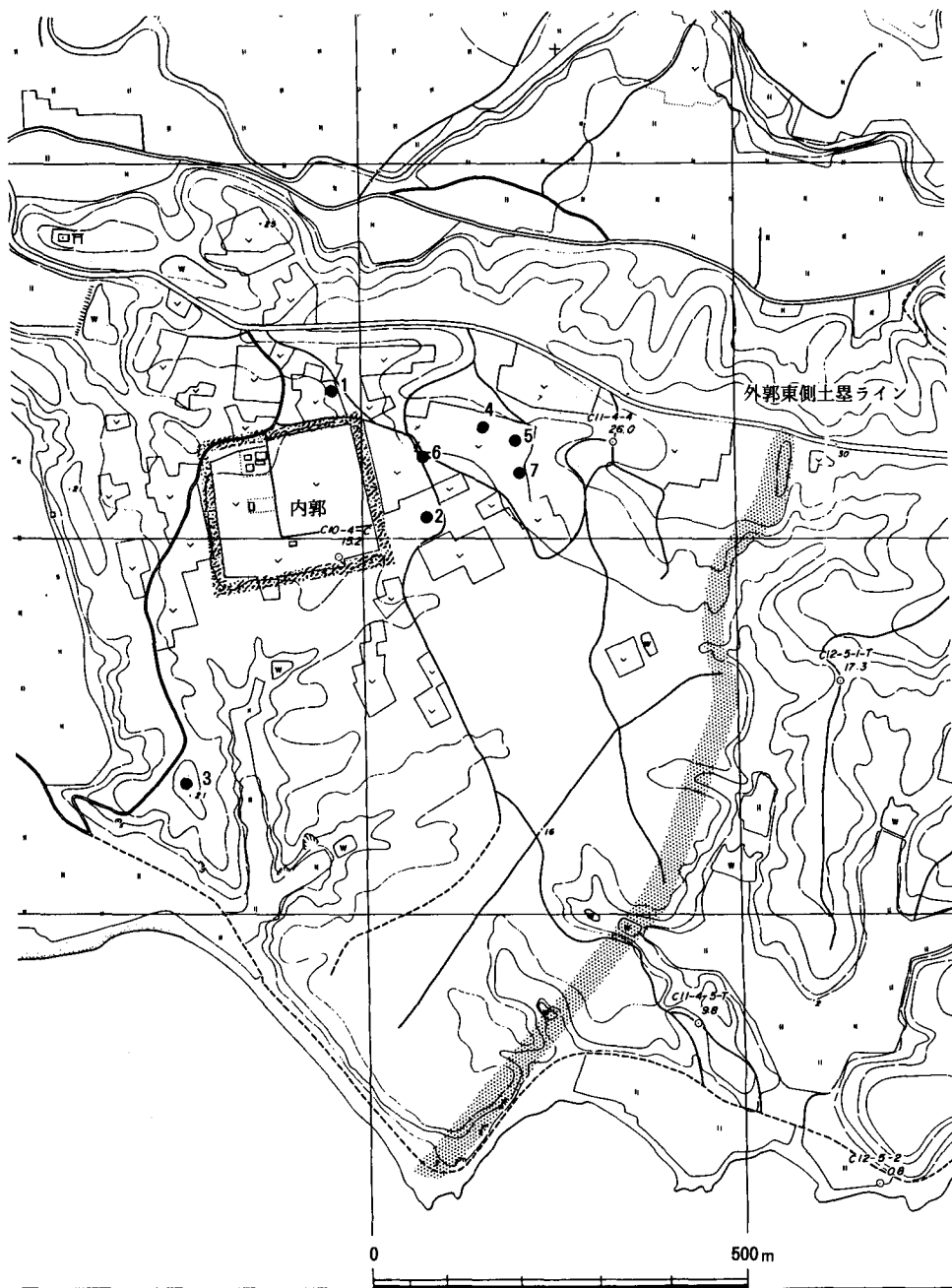




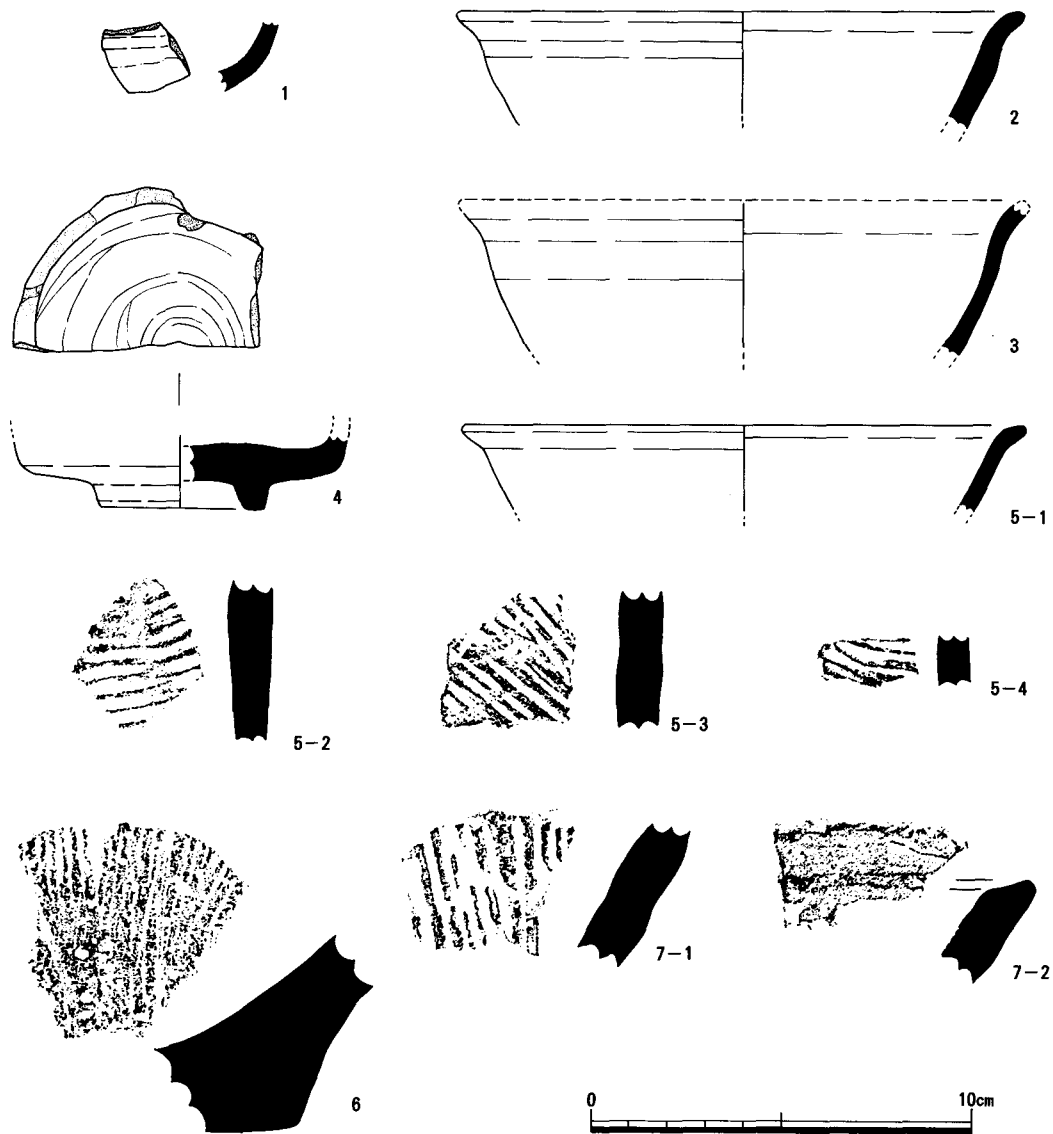
第20図 福島城跡分布調査における古代・近世以降遺物の散布

(内郭内のドットは、内郭内で遺物が採集されたことを示すものであって、  
厳密な採集地点を示すものではない。)

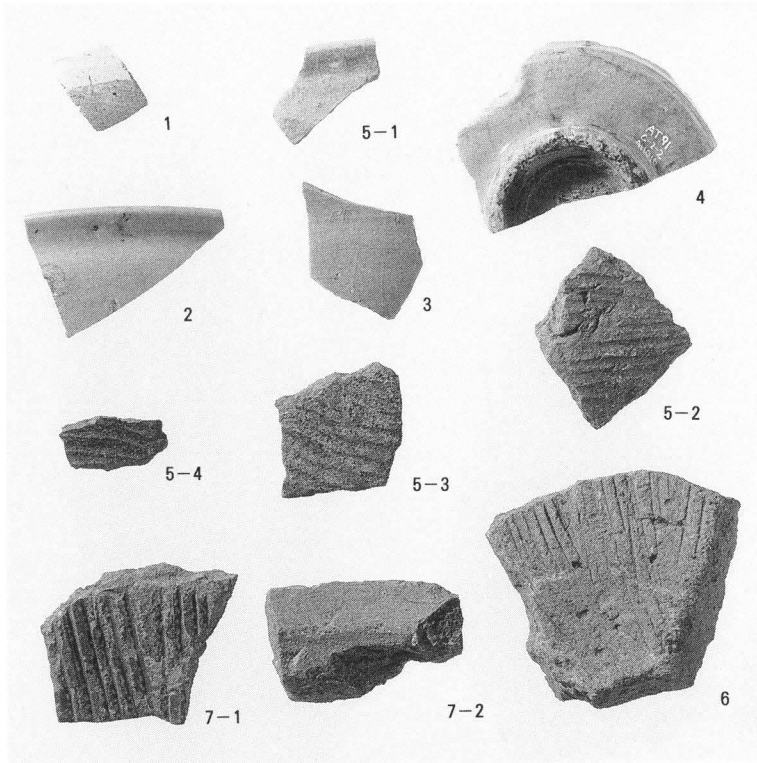
(市浦村森林基本図を原図として作成)



第21図 福島城跡分布調査における中世遺物の散布  
(地点番号と第22図の遺物番号が対応)  
(市浦村森林基本図を原図として作成)



第22図 福島城跡分布調査採集中世遺物



第23図 福島城跡分布調査採集中世遺物写真

### (3) 小 結

分布調査においては、地形と遺構に留意しつつ、遺物採集地点の記録と採集遺物の時期別計量を行なうならば、遺跡の有無の確認だけではなく、遺跡の実態にも一定程度迫る情報を得ることができる。今回実施した十三湊・福島城についての詳細分布調査においても、従来の成果にくつつかの新たな知見を加えることができた。

#### 十三湊遺跡

注意される諸点は、以下の通りである。

- ① 採集資料の年代は少量の縄紋土器を除くと、12世紀中頃～末以後に属する。
- ② 中世資料は、中国製陶磁器、瀬戸、珠洲が中心であり、常滑・越前・京都系土師器も少量存在する。数字には現れないが、当然、漆器・鉄鍋も豊富に存在したであろう。出土の稀少な資料としては、高麗象嵌青磁と中国製天目碗がある。なお近世資料には漁具を含むが、中世資料にはこれを確認できない。
- ③ 採集資料の量は14世紀中頃～15世紀に急増する。
- ④ 遺物は12・13世紀には土塁北側に散布し、14・15世紀では土塁南側に広まるとともに、散布量も土塁南側の方が多くなる。

- ⑤ 中世と近世の資料の年代は連続しない。中世で最も新しい資料は15世紀末に属し、16世紀が空白となる。
- ⑥ 近世資料の散布域は、中世資料全体の散布域とほぼ重なる。
- ⑦ 近世資料は、唐津・伊万里・堺湊焼・京焼系等の遠隔地の製品のほか、唐津写しあるいはなまこ釉等の東北在地窯産と推定できるものが多い。
- ⑧ 近世資料は近世後期に散布量が増大し、近代に連続する。採集量は中世全体より多いが、年代幅を考えると必ずしも量が増大するわけではない。

以上の沿革は、奥州平泉や道南勝山館との関係を含めて、東北における物資集散の中心地機能を果たしたであろう十三湊の盛衰を考察する大きな手掛かりになるであろう。また、この分布調査の成果は、今後の発掘調査を進める上での基礎資料となるだけでなく、部分的にならざるをえない発掘成果と組みあわせることで、より豊かな十三湊の姿を描くことにもつながるはずである。

### 福島城

以下、注目される諸点を挙げる。

- ① 古代の遺物が「内郭」部分で見られる。
- ② 中世遺物が「内郭」部分では1点も採取されていない。また、「内郭」外の東側の畑地で中世遺物のまとまりが確認できる。中世遺物の年代は14世紀中頃から15世紀前半代におさまり、中世十三湊の盛衰と同一歩調をとる遺物群である。
- ③ 近世以降の遺物は「内郭」部分を中心に見られるが、その周辺では散見される程度である。福島城の「内郭」については、十三湊とは異なり、現状が遺物採集に最も適した畑地であるにもかかわらず、1点の遺物も採集することができなかった。これは小規模な山城では、しばしば経験することであるが、大規模な中世城郭としては異例のことに属するであろう。このことの解釈としては、①遺構が深く埋れている、②本施設が非常時のためのものであり日常的には使用されなかった、③使用期間が極く短かった、④遺跡の年代観に問題がある、等が可能であろう。従来の調査の知見や、福島城が中世城郭としての異例の構造をもつ点などから見て、上記のうち④の可能性が高いものと推測される。

当然ながら、上記諸点の結論付けについては、発掘調査の結果を待つべきであり、その解明を目指して、発掘調査を実施した。その成果は次節で報告する。

〔宇野隆夫・前川 要：富山大学人文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員；  
高橋照彦：国立歴史民俗博物館考古研究部；榊原〕

### 〔参考文献〕

- 千田・小島・宇野・前川 1993「福島城・十三湊遺跡1991年度調査概報」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集。  
吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館。